

第72回山口西田読書会

出席者：佐野先生、他7名

1 前回の議事録

竹本さんの議事録が発表された。

- 竹本さんは、西田先生が、純粹経験でも、至誠であるものと、そうでないものがあるということを指摘された。

問い：至誠とは何か？

この問いに関連したテキストの該当する箇所を読んだ。

(3, 10, 5) と (3, 11, 4) より

○至誠＝真の人格要求であるということを確認した。

(3, 11, 4) → 「自己の知を尽くし、情を尽くした上において始めて真の人格要求すなわち至誠が現れてくるのである。」

○至誠とは、希望、好き勝手な振る舞い、盲目的衝動などではないということを確認した。

○真なる要求であれば、行為も動機も必ず善である。

(3, 10, 5) → 「各人の表面的意識の中心として極めて主観的な種々の希望如きものをいうのではない。(中略) 反ってこれらの希望を没し自己を忘れたる所に真の人格は現れるのである。」

(3, 11, 4) → 「ある人は放銃無頼社会の規律を顧みず自己の情慾を検束せぬのが天真であると考えておる。しかし、人格の内面的必然すなわち至誠というのは知情意合一の要求である。」

問い：純粹経験は善悪の区別を超越しているのだから、我を忘れて殺人を犯すことも悪にならないのでは？

○殺人は盲目的衝動に当てはまるだろう。

○生きるために、やむを得ず殺すことだってあるだろう。その場合、罪ではあるかもしれないが悪ではないだろう。罪と悪は異なる概念である。

○善なる要求がある以上、悪は成さないはずだ。

- この議論に関連して、佐野先生から次の問いが出された。

問い：罪悪とは何か？なぜ人はそれを成すのか？

『倫理学草案』より

- 罪悪とは、人格の深い要求があるにも関わらず、一時的な欲求（偽我による要求）に従うことである。
しかし、この場合、西田先生は、生きている限り、罪悪から逃れられない人間を主張しながら、至誠を主張していることにもなる。
- 続いて、悪についても議論がなされた。
(4-4-5) → 「固より悪は、宇宙の統一進歩の作用ではないから、それ自身において目的とすべきものでないことはもちろんである。(中略) 罪を知らざる者は真に神の愛を知ることはできない。(中略) 罪悪、不満、苦悩は我々人間が精神的向上の要件である。」
- 悪はこの世を深遠なものにしている。
- 悪の自覚が増す→自ずと至誠にしたがって生きていかざるを得なくなる。

2 テキストの内容

- テキストは、「第2編 実在 第九章 精神」の第6段落から読み進めた。

(2-9-6注)

- 美術家の精神は、宇宙の活動そのものと一致することがある。
美術家の宇宙の活動そのものを表す芸術作品＝深遠なるもの表れ。
その作品は宇宙のリズムと一致している。だから、素晴らしい作品は誰もが感動する。

問い：表面的なる微弱なる精神とは何か？

- 佐野先生から、偽我と考えてよいという回答がなされた。

(2-9-7)

問い：矛盾衝突とはどういうことか？

- 偽我ゆえの苦しみではないだろうか。苦痛と快樂が交互に現れていく。そのループ。
- 自然とは、その人がそうしないと生きていられないような何かではないか。
→それは、個人的空想では？その人がそう感じるだけ。

(2-9-7注)

- 無限の幸福を保つことが善であるということが確認された。

3 哲学的問い

- 西田先生は、至誠を主張しながらも、偽我から逃れられない人間の姿についても述べられていた。さらに、苦悩、罪悪、不満といった悪がこの世を深遠にし、人間の精神的向上の要件であることも認めていた。つまり、西田先生は、人間が、主客の世界から逃れられず、主客身分の世界に達し、宇宙の真理と合一しても、それは一時的なも

のであり、また、偽我の世界に身を宿してしまう存在であると考えられていたのではないだろうか。諸学問だけでは、解明しきれない複雑怪奇な存在である人間とは何なのかという問いに西田先生は主客身分の立場から明らかにしようとしたのではないだろうか。